

私の考える「孤独力」は、孤立ではない。ポジティブな意味あいをもった言葉である。この言葉には新しい魅力がある。そこには、孤独をいかにして受け入れて、力に変えることができるか、という自分自身への挑戦が含まれている。

一方で、楽しんで時間をこまかく刻んでいく人もある。料理が好きで、ものすごいスピードで同時に何品もの料理を仕上げる。おなかをすかせて待っている人がいる。「ちょっと待ってるよ」というや、**野菜を刻む**。フライパンに油を入れて熱しながら、冷蔵庫から各種の食材を取りだし、深鍋に水をなみなみと入れて火を入れる。

必要な調味料類がずらっと目の前に並ぶ。炒めものがすんだときには、蒸しものの支度がすでにできている。自分でつけたピクルスが皿に盛られる。こんなぐあいに曲芸のように次々とできあがっていくのである。

この男の頭のなかには仕上りのイメージがあり、それらを同時進行させるフローチャートが浮かびあがっているのである。時間を圧縮して無駄な時間を一秒とつぐらぬ。彼の最高の仕上がりは、すべての皿が料理で満たされたとき、洗いものが同時にすべてすんで、きれいに整理されていることである。

好きなことに打ち込む

ちょうどテレビで、「家政婦は見た！」というミステリードラマが好評のうちに終わったときだった。ひとりの酔っぱらいが「管理人は見た」って小説が書けるんじゃないのか、そういった。

それが天啓となったのである。ふだん小説を読むこともないその男は、いきなり小説を書きだした。彼には書きたいことがあった。

九階にすてきな奥さんがいて、いつもにこやかに話すので「感じいい人だなあ」と憧れていたのである。それがきっかけになった。バツイチ独身の管理人が、マンションの住人のすてきな奥さんと結ばれる。モデルは自分とあの人。実際の彼は、結婚していて二十歳すぎの娘さんもいるのであるが。

居酒屋の常連として知りあったフリーの編集者に、書きあがったそれを読んでくれと渡した。私はその編集者からこの話を聞いたのである。

すさまじいものだったそうだ。こんなものをいまだにもっている人がいるのか、というような古いワープロが使われていた。行間がほとんどなく、漢字ばかりが目立つ文字の団子である。縦に読むのか、横に読むのか。段落の頭の一字落としもなく、ゆえに段落もわからず、接続詞、副詞、なにもかも漢字に変換してある。

書く目的がはっきりしているから、そのために都合のよいことが次々と起こる脈絡もなく、マンションのちょっとした事件が挿入される。バイオレンスあり、エロあり、童話あり、怪談あり、ファンタジーあり。

思いついたことが整理されないままに書きこまれている。憧れの奥さんはDV（家庭内暴

力)で救いを求めてくるし、その旦那は強盗に刺されて死ぬし、めでたく結婚して新婚旅行に行った先でハイジャックに遭遇するし、そこで主人公は活躍するし、なんでもあり。

「これは大人のお伽噺だな」フリーの編集者は思った。編集者というものは、その人のいちばんいいところを探す職業なのである。「人に読んでもらうなら、その人が読みやすいようにしなければ」からはじまって、いろいろアドバイスをした。それからついでにこんなことをいった。

「マンションで幸福の城だよ。梅川事件で覚えてるかい。あれは銀行で起こった凄惨な事件だったけど、おたくのマンションの広いガラス張りのエントランスでそれが起こったらどうなるだろう」

「あっ」と彼は言って、すぐに第二作を書きだしてしまった。自分では気づいていなかったが、空想家だったのである。

誰にもこういう眠っている能力があるのではないか。社会的なクビキから解き放たれる、そんな能力のことである。彼は編集者にいわれて小説を読みだした。図書館に行く習慣ができた。朝、起きて書き継ぐのが楽しみである。

居酒屋で言われたひとことが、新しい自分をささえるようになったのである。彼は、このむちゃくちゃな小説を書きまくった果てに、やはりどこかに到達するに違いない。それは社会的評価を離れても、素晴らしい旅といえると思う。

しかしいまだに、とくに予後の悪いケースでは、医師は、患者本人ではなく家族に伝えてしまうことがある。「予後が悪い」とは、手術ができない、肺や脳に転移しているなど、今後の経過はよくないという意味である。

それはこんな流れで伝えられる。

「ご主人、もう手術ができないような大腸がんが見つかりました。どうしますか？ ご本人に伝えますか？」と、医師が家族にまず話してしまう。本人より先に、家族の希望を聞くのである。

すると「ああ見えても、家の中ではいちばん気が小さいんです。悪い情報は希望を失わせますから、伝えないでください」と答える家族が多いのである。医師は「わかりました」といって、カルテに「**家族の強い希望で、本人には告知しないこととする**」と書きこむ。

どこか間違っていないだろうか？

世の中、「個人情報」という言葉が蔓延していて、何かあるたびに「それは個人情報ですから」という壁が立ちほだかる。では、「ある人間にがんが見つかった」という情報はなんだったのか？ これこそ、「第一級の個人情報」である。それが個人の許可なく、家族に伝わるのである。

従来の固い絆で特徴づけられた日本の家族関係・家族構造が、このようなことを許容してきたのである。これははっきりとした「個人情報保護法違反」である。しかし残念ながら、いまだにこの傾向は残っている。

人は、そんなに弱い存在ではない。ひとりで生まれてきたので、ひとりで死ぬことも知っている。人生の最後に、自分の人生の残り時間を伝えられなかったり、嘘をつかれていたとしたら死にきれない。たとえば「二カ月間……うまくいけば三カ月くらいかもしれない」と医師に告げられたら、人はどうするのか？

その二カ月間を、ずっと泣きつづける人はいない。二カ月間のうちに自殺してしまうことも考えにくい。自分なら、その二カ月間に、自分の人生のふり返しをして、**みんなに感謝して、穏やかにその日を待ちたい**。「濃縮した」短い時間を過ごすか、時間や日数が問題ではない。濃厚な時間が大切なのである。

孤独力が強くはたらいっている末期患者らは、友人を呼び、親戚を呼び、別れを告げ、「ありがとう」といいたいのである。その時間を医師が奪ってしまっ**てはいけないのだ**。

家族も、大切な人生のふり返しや、感謝の思いを伝えあう時間を奪ってはいけないのである。残された家族は、伝えなかったことにどこか罪悪感を感じながら、いずれ死んでいく。そのとき合わせる顔がないだろうに……と、私は思っている。

食べものを断ち、水を断つと人は死ぬのか。死ぬるのである。安楽死なのか、尊厳死なのかどうかは私にはわからない。衰弱して行って血圧が下がるという死に方だと思う。

末期の患者をみとっていると、最後は腸閉塞や意識障害になり食べなくなることが多い。そこからは点滴で栄養を送るのだが、点滴で同じカロリーを入れても、「腹力」というものがまったく違う。**食べもので入ったカロリーはじつに力強い**のである。食べられるかどうかということが、人の生きる力にとってきわめて大事なのだ。

空海の入定の様子は、すべて心配なことは行動で改善し（現世利益）、身口意（しんくい）の**三密**によって自己と宇宙との一体化・同化によって死を受容していった「即身成仏」の完璧な事例であった。

多くの空海論を現代的に応用して活かしたい。私の場合では、「終末期医療であらためて**即身成仏を考えていきたい**」ということである。

徳目をそなえる努力を行う生き方（六波羅蜜ろくはらみつ）